

＜シンポジウム(4)-3-3＞神経心理学の進歩：たいせつなことをわかりやすく

## 失語症—古くて新しい問題

波多野和夫<sup>1)</sup>

要旨：失語は脳損傷による言語の障害であり、あくまでも脳とその損傷を基礎に理解するのが基本であろう。この考えをもっともよく表現するのが「Wernicke-Lichtheimの図式」である。これは今でも失語論の中心位置を占める。しかし失語の現象のすべてが脳とその損傷から直接に理解できるとは限らない。そういうことをAlajouanineの「未分化ジャルゴン」の概念とその自験症例を通じて考えてみた。とくに近年健常小児の「ジャルゴン型の言語発達」の提唱を受け、この考え方が臨床例にもよく当てはまるように思われた。「脳とところ」の問題は人類最大の難問である。失語は、これまでもまた今後も、この難問の重要な取りかかり点であり続けるであろう。

(臨床神経 2013;53:1237-1239)

Key words：ヴェルニック-リヒトハイムの図式、未分化ジャルゴン、ジャルゴンの3段階経過説、ジャルゴン型言語発達

### 時代錯誤の問題

21世紀は「脳の世紀」だそうで、自閉症も発達障害も統合失調症も、みな脳の障害であり脳の病気であるという話を誰も彼もいうようになった。プラトン・アリストテレス以来数千年にわたって人類を悩ませてきた「物質と精神」=「脳とところ」の問題は、脳一個の問題として解決されるかのように見える。精神医学の先生方すらそういうのだから、精神疾患の病人の介護と管理については看護学部で精神看護学にまかせて、医学部の精神医学教室はすべて廃業の上で神経内科学教室に吸収合併したらいいのだろうと思う。しかしこの世には哲学者という一種の変人がいて、自分たちのいうことが時代錯誤だと自嘲または韜晦しつつ「エックルズ、シェリントン、ペンフィールドといった生理学の碩学がその老年になって首をかきげたくなるような哲学的言動に陥るのをみれば、時代錯誤も一種の向精神薬の効能を持つこともあるだろう<sup>1)</sup>」などと恐ろしいことをいう。この平成の御代に「脳とところ」の問題を蒸し返すのは、「神ながらの道」だの「敷島のやまごころ」だのといひ出すのと同様の時代錯誤なようである。

### 失語の中心的ドグマ

運動と感覚というのも数千年の歴史を持った概念である。「Wernicke-Lichtheimの図式」は失語(=言語の障害)を脳の構造と直接に結びつけて理解しようという仮説である<sup>2)</sup>。つまり言語と脳を運動と感覚の2つの要素に分離し、それぞ

れの独立した障害として失語を理解しようという仮説である<sup>2)</sup>。この理論こそがこの2世紀近くにおよぶ神経心理学の時代を通じて、もっとも成功しもっとも支持されている考え方であるといつてよい。いわば失語の「Central Dogma」に相当する。この図式には「概念中枢」というものが仮定的に要請されているが、この中枢には運動と感覚の区別がない。そういえば、たとえばいわゆる「知性」には運動的知性や感覚的知性というようなものはない。「精神」なるものにも運動的精神や感覚的精神は考えにくい。失語というものが、「脳とところ」をつなぐ存在であることはこんな所にもあらわれているように見える。

### ジャルゴンについて

最近筆者はAlajouanine(1890～1980)の失語論<sup>3)</sup>を紹介し、その人と学説について解説した<sup>4)</sup>。サルペトリエールの神経学教授として20世紀を通じて活躍した人であり、とくに失語研究に大きな功績を残した。彼はその失語研究を通じて常に上記の「中心的ドグマ」を拒否し続けた。むしろ神経系を進化・発展として表象するJackson(1835～1911)の思想に依拠し、神経系の解体による脱落症状と脱抑制症状(陰性症状と陽性症状)の組合せとして、主として表出言語の障害についての理解に新しい局面を開いた。彼の研究の代表的な一つがジャルゴンをテーマとする一連の論文であり、とくに「未分化ジャルゴン」の問題をわれわれに残した。未分化ジャルゴンは、意味もなく文法的配列も欠く(助詞助動詞などの機能語が出現しない)「つぎつぎに変化流動する語音の間断なき流れ」という発話であり、急性期に一過性に出現す

<sup>1)</sup> 佛教大学社会福祉学部〔〒603-8301 京都府京都市北区紫野北花ノ坊町96〕  
(受付日：2013年6月1日)

るのみで、その後、語新作ジャルゴンを経て意味性ジャルゴンへと経過する（ジャルゴンの3段階経過説）。その実例としては「sanénéqueduacquitescapi」という発話例が知られている。

### 未分化ジャルゴン

未分化ジャルゴンとその後の3段階経過説については、未分化ジャルゴンが急性期のみの一過性出現であるためか、これまで適切な失語症例が報告されぬまま今に到っている。明瞭に指摘されたのはてんかん性のジャルゴン<sup>5)</sup>とジャルゴン失書<sup>6)</sup>の症例である。むしろ本邦では未分化ジャルゴンの非一過性・持続的出現例の報告がいくつか積み重ねられている<sup>7)8)</sup>。最近われわれはこれに該当する症例を観察する機会を持った<sup>9)</sup>。症例 MK は74歳女性。左被殻出血。構音障害をともなう重度失語であり、会話では「カモメディヤ、マモメイットトウヨコレハ、コンモッテディディ、ジャトウワージャディカモア、カイデイコパカイ、コパデネ、カモネティ、ティコーパデエイティ、コーパーデジェイキカヤオンマ、ワイキキ・・・」などと流暢性の発話をする。

### ジャルゴン型の言語発達

矢野<sup>10)</sup>は小児の言語発達における「ジャルゴン型」を観察した。これは活発な運動性を示す男児に多く、母親は言語障害を心配するが、3歳頃になるとほぼ正常の言語発達をとげる。このタイプの小児を観察すると、ちょうど成人失語の「未分化→語新作→意味性ジャルゴン」と同じ現象経過を示しているという。一般に成人の失語患者の発話が小児の言語発達の何らかの段階に類似しているという指摘はこれまでも数多くなされてきた。一方は成人言語障害の回復経過であり、他方は健常小児の言語発達である。ただちに同一視はできないとしても、何らかの関係があるという見方も考慮に値すると思われる。少なくともこの類似性をまったく無視することはできないであろう。たとえば、本邦の未分化ジャルゴンのほとんどの例に構音障害が合併しているが、小児の言語発達

の初期における構音運動の未熟性との類比は不可能であろうか。つまり「未分化」とは、意味論的・統辞論的・語彙論的に未分化であるが、さらに音韻論的にも未分化であって、これが「構音障害」という形をとるのではないか。そのような説明も不可能ではないように思われる。

### 結語

いずれにせよ失語は古くて新しい問題である。「脳とこころ」という人類永遠の難問に対して、常に多くの視点を提供し続けてきたし、今後もそうであろうと思う。

※本論文に関連し、開示すべきCOI状態にある企業、組織、団体はいずれもありません。

### 文献

- 1) 大森荘蔵. 時間と存在. 東京: 青土社; 1994.
- 2) Lichtheim L. On aphasia. *Brain* 1885;7:433-484.
- 3) Alajouanine, T. Verbal realization in aphasia. *Brain* 1956;79:1-28. (波多野和夫訳. 失語症の言語症状. 東京: 新興医学出版社; 2011.)
- 4) 波多野和夫. Alajouanine とその失語学について. in 2011;1:59-94.
- 5) 井上有史, 清野昌一. てんかん発作の神経心理症状—発作後ジャルゴン失語の一例をめぐって. *神心理* 1989;5:47-55.
- 6) 波多野和夫, 辻 麻子, 濱中淑彦. ジャルゴン失書について—症例報告. *神心理* 1992;8:162-168.
- 7) 波多野和夫. 重症失語の症状学. ジャルゴンとその周辺. 京都: 金芳堂; 1991.
- 8) 松田 実, 鈴木則夫, 先天目英比古ら. 「未分化ジャルゴン」の再検討: 症例報告と新しいジャルゴン分類の提唱. *失語症研* 1997;17:269-277.
- 9) 田村俊暁, 出塚次郎, 井口正明ら. 助詞・助動詞が出現しない重度ジャルゴン失語の一例. 第36回日本高次脳機能障害学会, 宇都宮: 2012.11.22-23.
- 10) 矢野のり子. ジャルゴンタイプの言語発達. *児童青年精医と近接領域* 2006;47:440-451.

**Abstract****Aphasia—a new as well as old problem**Kazuo Hadano, M.D.<sup>1)</sup><sup>1)</sup>Department of Social Welfare, Bukkyo University

Alajouanine (1956) established a concept of jargon as a speech symptom of aphasia and gave clinical descriptions of three types of jargon—undifferentiated, asemantic (neologistic) and paraphasic (semantic) jargon. Several case-reports of undifferentiated jargon in Japanese language have been published in clinical aphasiology. On the other hand language development of jargon-type in normal children was reported in developmental psychology. We point out a phenomenological similarity of clinical language symptoms of jargon with language development of jargon-type considering its neuropsychological implications.

(Clin Neurol 2013;53:1237-1239)

**Key words:** Wernicke-Lichtheim's theory, undifferentiated jargon, three-step recovery theory of jargon, language development of jargon-type

---